



天使

発行

天使大学 広報委員会

〒065-0013

札幌市東区北13条東3丁目

TEL 011-741-1051(代)

FAX 011-741-1077

http://www.tenshi.ac.jp

天使大学第一回生 卒業を迎えて

卒業おめでとう

学長 近藤潤子

天使女子短期大学から天使大学に改組転換して、4年が過ぎ完成年次を迎えました。2003年4月に初めて全学年がそろい、2000年4月に入学した新入学生は4年生となり、卒業に向けた1年を過ごすことになりました。

卒業を迎えた4年生は、その始まりから、いつも「初めて」という形容詞がつくことになりました。「初めて」の4年制大学の1回生を迎えた入学式は、新入学生を迎えた充実感と学士課程教育を始める緊張感をもって執り行われ、新入学生であった皆さんの大学生活がスタートしました。季節がめぐってゆく中で、短期大学時代から引き継がれパワーアップした行事が皆さんの学生生活に豊かな彩りを添えながら、4年間の月日はあっという間に過ぎ、卒業の日を迎えることとなりました。専門職を目指した学習は、学内外実習をはじめとして、ゼミや演習などを通して、学年進行とともに、厳しさを増しながらも、そうしたハードルをクリアするごとに、より広く深く専門性を身につけてゆく喜びとなり学習の推進力となったに違いありません。この4年間、卒業生の皆さんはもちろんのこと、学内の教職員にしてもさま

ざまなところでよりよくあるための議論や実践に全力をあげて取り組む日々となりました。

本学では2004年4月から、日本で初めての専門職大学院の制度による天使大学大学院助産研究科がスタートします。実践に焦点をあてエビデンスにもとづいて学習を体系的に積み重ねていく高度な専門職業人の育成を目的としています。本学は、今回の専門職大学院設置を皮切りに、既存の大学院制度による看護栄養学研究科(修士)看護学専攻、栄養学専攻もなるべく速やかに開設したいと考えています。今後より一層の発展拡充を目指したいと考えています。卒業生の皆さんが、社会のなかで疑問を抱き学びたいと感じたときに、母校がさまざまなサポートをし、いつでも応えることができるような大学でありたいと考えています。

これからは社会の中で、「看護とは」「栄養とは」をいつも問いながら学んだ学生時代の基礎の上に、一人ひとりがそれぞれの実践を通して問い続け答えを導くことになるのです。

卒業生の皆さんは、これから社会という第一線の現場で、人々の生命と健康に関わる看護と栄養の専門職の一員として社会で実践し、よりよい実践を通して社会に貢献し、自己実現を図っていくことになります。建学の精神「愛をとおして真理へ」を胸に、皆さんのこれからの活躍と健康を願っております。

卒業生の皆様によるこびを、後援会会員の皆様に感謝を

後援会会長 曾我文子

2000年4月8日、天使大学1回生として入学された皆様は、その日のことが忘れられない記憶として残っていることでしょう。私も同様です。と申しますのは、大学のさらなる発展に向けて教育事業を後援し協力することを目的として、天使大学後援会が設立発足した日だからです。

それから4年、皆様が各自の目標に向かって一生懸命学び、研究し、学内行事や臨地実習に励んでいる姿を拝見していました。また大学の学報や、華の会会報「萌芽」をすみずみまで読ませていただきました。後援会としてできる範囲で大学をバックアップするためには、大学を知らなければならなかったからです。

創立以来の色あせた校旗を天使大学名入りに新調することから始まり、役員の皆様や教職員の声をお聞きしながら、天使祭、各クラブ活動、ボランティア活動、講演会、図書費の援助、奨学金の増額等を行ってまいりました。また、初年度から地区別父母懇談会を道内9ヶ所で開催し、父母には大学の情報を、大学は親からの日常的な意見に応えるためにも、

得ることの多い行事内容となりました。故事にありますように、「この親にしてこの子あり」、つまり学生が立派であり礼儀正しいのは、親が優れているからということを実感しました。また、現代社会の苦しい経済の中、いかに毎日努力を続けて仕送りしているかというご両親のお話に目頭が熱くなったのを覚えています。「無事の卒業まで私たちは頑張ります」と。また、「大学の教育方針、内容がよく解りました。このように親切に一人ひとりの学生を大切にしてくれる大学は他にはありません」と断言してくださった父親の声をお聞きし、教職員の皆様の教育に対する熱意の深さをさらに知ることができたのです。

今年の卒業式は、皆さん真新しいガウンと角帽姿で堂々と入場し、ご父母の皆様も私も、感激でいっぱいになることでしょう。後援会として微力ながらご援助できたことを嬉しく思うと同時に、会員の皆様に感謝申し上げます。

社会の中で謙虚に、誠実に、勇気をもって前進する人間。それがエリートなのだと思います。世間の期待に応える天使大学での生活が、これからの皆様の人生にとって多くの貴い財産となり、人間として生きていく上での大きな励まし、心の支えとなることでしょう。皆様の前途のご多幸を心よりお祈り申し上げます。

初めての卒業生へ

看護学科 学科長 菅原邦子

看護職という専門職業を通して「誰かのために役に立ちたい」と夢と希望を持って入学された1回生の皆様、ご卒業おめでとうございます。

看護職への4年間の道のりは、想像以上に厳しく辛いことだったと思います。さらに1回生は、先輩がいないため行き届かない事や初めての経験の中で戸惑うことも数多くあったと思いますが、クラスメイトやご家族、実習施設の方々や非常勤講師、そして教職員の皆様の支援を受け、なによりも天使大学1回生としてのプライドを持ってたくましく人間性豊かに成長してくれました。お世話になった皆様に心より感謝申し上げます。

カトリック大学である天使大学で看護学を学んだ皆様は、本学の建学の理念(per caritatem ad veritatem=愛をとoshie真理へ)である相互作用の愛(caritas=カリタス)の実践が看護そのものであることに気付かれたことでしょう。この意味を4年間の授業科目や臨地実習、さらに合唱コンクールや天使祭、クリスマスや修養会、チャペルアワー等の学校行事を通して学んだのです。このカリタスの愛の源は、神様からの愛です。私たち一人ひとりがかけがえのない存在として、そして無条件に愛されて存在していることにより、他者とも神様とも繋がって存在し、その関係の中で人は真に癒やされ、人間としてお互いに成長することができるのです。

この意味を皆様が学ばれたと実感できたのは、本学の理念教育の科目のひとつであり統合科目である「生と死の看護ゼミⅡ」の感想文でした。専門看護者として、一人の人間として、医療の受け手である患者・家族にともに関わることの重要な意味に

ついて記してありました。それは、ともに存在する(being)ことの意味、同じ人間としての当たり前の感覚を忘れないこと、私たちの手にゆだねられた他者が存在していることへの畏敬の念を呼び起こすものであること、関心と共感と思いやりを持って関わっていく勇気と覚悟により何かが開かれていくことを宿していること、つまり「存在することはケアすること」、そこから看護が始まることの確信でした。

最後に、「医学には限界はあっても、看護には限界がない」ことを実践した、シスター寺本の言葉を贈り、それぞれの場で一人ひとりが平和の道具として「地の塩・世の光」となって貢献することができますようにと祈っております。

「看護は出来上がった商品ではありません。
看護師はデザイナーであり、料理人であり、
対象の個性と自己のサイエンスとアートで創
造していく芸術が看護です」

寺本松野「看護は祈り」より



夢と希望を胸に

栄養学科 学科長 山本愛子

1回生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

明日からは専門職業人としての一歩がはじまります。これからの社会で強く求められる管理栄養士としての能力は、高度な専門知識・技術、カウンセリング能力、豊かな人間性です。

実践の場では相手の立場に立って、優しいまなざしで一緒に考えることが大切であります。今日まで学んだことを統合して、強く、たくましく、広い視野で多面的に物事に対応して欲しいと願っています。

かえりみますと、2000年に天使女子短期大学から天使大学に生まれ変わりました。2年間の栄養士養成から4年間の管理栄養士養成を夢みていた私どもにとりまして、今日の日は言葉にあらわすことができない位の感動と喜びがあります。

卒業も近くなった1月26日、「食といのちのゼミ」で特別講演を全員で聴きましたね。その講演を聴いて、みなさんが提出したレポートを読まれた講師の先生からお便りをいただきました。

お便りには、「専門職として他の人々にどのように接していくことが重要か」と言う設問に対して皆さんは真摯に受け止め、答えています。特に専門職として相手の立場に立って心ある対応が必要とか、今まで病院実習などでは気づかなかった介護をしている家族の方の気持ち、対応の在り方、またできる限り患者様

のベッドサイドに行き栄養状態や食べ方を把握し対応していくべきなど、たくさんの気づきがあったことを記してくれました。

やはり、天使の精神は健在であると思いうれしくなりました。社会に出たら皆さんとやっていく人たちが確信しています。そして最後に先輩が期待して見守っています」とお伝えくださいますと結ばれています。

管理栄養士は医療職として位置づけられています。地域住民の方々への栄養相談、病院などでは他の医療スタッフの方々や連携を深め、患者様に適切な対応をしていくことが大切です。これからの日々の歩みの中で新しい情報を常に収集し、時代のニーズに答えていくことが重要です。人々から信頼され、選ばれる専門職業人として、大きな夢と希望を持って羽ばたいて下さい。時には、母校に羽を休めに来て下さい。



卒業生へ

教養教育科科长 後藤 聡

ウサギとカメが山の頂上を目指して競争しました。カメは途中で眠っているウサギを追い抜いて先に頂上へ着きました。ウサギを置き去りにして……。カメは地道に努力して勝利を手に入れましたが、勝つことや頂上という目的しか見えず、ウサギに対する自らの「在り方」に気が付かなかったのかも知れません。大人は子どもに赤信号で道路を渡ってはいけませんと語っていることでしょうか。でも、赤信号を渡っている大人がなんと多いことか。知識を持っていっても自分の「在り方」と矛盾していることに気が付いてないのかも知れません。

ガブリエル・マルセルという人は、知識、地位、資格などを

「持つ (avoir)」ことよりも人間としてどう「在る (être)」かが重要であり、人間に最後まで残るのは「在る」ことなのだと説いています。人間としていかに「在る」かは、そのまま専門職業人としての姿にも自然と写し出されることになると思います。対象者のために自分が隣人となっていかに施すことができるか、そこにイエス・キリストが語った「天に宝を積む」生き方が問われることになりましょう。本学でそのエッセンスを学んだと思いますので、これから味付けをするのはご自身です。

卒業生のみなさんは、多忙な4年間を走り続け、期待と不安がいっぱいの将来へ心が向かっているかも知れません。卒業はそんな新天地への始まりですが、学生の終着でもあります。その節目にちょっと立ち止まり、置き去りにしてきたもの、疎かにしてきたことがないか振り返ってみてはいかがでしょうか。それはあなたが人間としてあなたらしく「在る」ために必要なことだったかも知れません。卒業とは、そんな時でもあるのではないのでしょうか。

ご卒業おめでとうございます。

これからが、はじまり、はじまり

教務課長 大和幸子

ご卒業おめでとうございます。なんといっても天使大学開学初の卒業生。おめでとう！

第1回生である皆さんは、何ごとにつけ初物づくしの4年間でした。とはいえ、「天使」の長い伝統の上に培われた4年間でもありました。合唱コンクール、体育祭、天使祭、革の会、修養会、教室の掃除（最近、見かけなくなった？）しかり。

何よりも大きな伝統は、使命感をもった専門職業人としての旅立ちでしょうか。それは、「愛と真理に生きる」ということが一体どういうことか、模索する旅立ちともいえるのでしょうか。

「天使」の礎を築かれたシスターのお一人が、短期大学閉学記念式典のスピーチに、こんな聖書のことばを引用されていました。

「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば多くの実を結ぶ」ヨハネ12、24

このことばに続く箇所には、次のようなことが書かれています。自分の命を大切にすると人は結果的にそれを失うことになるけれども、自分の命を惜しまない人は、永遠の命を得るのです、と。

シスターはどなたも、神様の意思に従って、自分を捨てて、他者を活かし、多くの実を結ぶことを実践してこられました。それでも、迷いながら祈りながら実践してこられたのです。

修道会が天使学園の経営から退くことを決断したのも、まさにこの聖書の精神からだと思います。

皆さんのご両親、先生も、きっと皆さんを活かす為に、自らに死ぬことを少なからず実践されてきたはずで。

こんな伝統に育まれた皆さんお一人おひとりが、胸に熱い使命感を抱いてそれぞれの仕事に励んでいただけるものと信じ、期待しています。

最後に、卒業はスタートライン。これからが本当の勉強のはじまり、はじまり！ご活躍をお祈りします。

学生課の1年

学生課 安田トモ子

卒業を迎える4年生までがそろい、天使大学としての完成年次を迎えた今年、かねてからの念願が叶い学生課職員が一人増えた。50代60代の2人で切り盛りしてきた学生課に新しい力が加わりホッ……フットワークがよく笑顔で学生に対応する若い頼もしい男性職員だ。3人でがっちりスクラムを組み、三位一体？？で学生支援にあたる。いつでも、どこへでも3人で出かけ、事に当たる。学生はその姿をどんな風に見ていたのか。

初めての卒業生の皆さんとの思い出は、学生課の学生支援の1年として数限りなくある。

4月、新入生が入り、なんとなく学生の動きもごこちない。男子学生が20人となり、新しいクラブも生まれた。のは良いが、元気に運動すると体育館のあちこちが壊れ始める。今まで女子短大だったからこんなことはなかった。「この程度は男女共学になったのだから必要な修理代と思ってください」と財務課へ頭

を下げる。非常灯やスピーカー、時計などに頑丈なカバーができ、ステージのネットが新しくなった。ピアノも奥にしまわれた。一年経ってやっと壊れ方も落ち着いた。元気にどんくろクラブ活動をしてほしい一方、これ以上は壊れませうようにと祈る。

5月恒例の合唱コンクール。学生課は選曲のための楽譜やテープの貸し出し、練習場所の調整、エレクトーンの貸し出しに忙殺されるが、放課後や早朝に練習の歌声が聞こえてくるととてもうれしい。今年は自由曲の発表とプレゼンテーションで評価することとなり、それぞれ工夫を凝らした発表に感心したり、笑ったり。

6月は学生主催の最大行事の天使祭。学生は悩みながらもいろいろなユニークな企画を考える。学生課はうまく事が運ぶように、あちこち調整したり、学生を急がせたり、事後には後始末の小言を言ったり。行事の後、実行委員が味わう達成感に共感し、涙する学生課。

11月の体育祭、12月クリスマスの集いを終えると学生が主体的に企画する行事は一周し、次の年度の役員に引き継がれる。次年度に向け新しい学生と一緒に組織作りから関わる。4年制大学になったのだから学生が主体的に動いていくことを願ってやまないが、できるかぎりの支援をこれからもして行きたい。学生課職員が一丸となって!!!!

卒業にあたって



初めての卒業生

看護学科4年 木村志乃

天使大学1年生としての4年間で、今、幕を下ろそうとしています。入学当初から「天使大学1年生」という言葉が、いつも私たちの背にありました。初めて天使の校風に触れた時、少し戸惑いを抱いたことを覚えています。しかし、天使女子短期大学の先輩はとて素晴らしい尊敬できる存在でした。先輩のようになれるのだろうかと思いながら過ごしてきた日々で、私たちは4年間で確実に変化しました。

私はこの4年間で好きになったことがあります。それは「看護」と「人」です。このことは私だけではなく、看護学科4年生全員にも感じられることです。普段の生活の中で、いつも声を掛け合う姿や、厳しい実習や演習等に皆で取り組む姿勢の根底には「看護」と「人」を愛している心があると思うからです。それはまさに天使でしか育む事のできない愛だと思います。愛は、看護者として看護を必要とする全ての人にケアするためにとても大切な事です。看護の中で私たちは、より良いケアを目指し続けます。それは相手を思う愛があるからこそできる事です。キリストから学ぶ愛の意味が、自分なりに見えてきたものがありました。それはすべて実習で出会った方々や教職員の皆様、先輩・後輩そして友人が私に教えてくれたのです。

後輩の皆さんの目には、今の私たちはどのように映っているのでしょうか。私たちが4年前に先輩を見た時のように、看護学科4年生の姿から何かを感じ取っていただけたらそれを心からうれしく思います。1年生としての重荷はいつしか、天使大学の学生としての責任ある後継者としての自覚となり、やらされていることから、自ら実行することへと変わりました。天使の心はこれからもずっと変わらずに受け継がれていくものだと思います。

また、私はこれまで両親のことを思うあまり、自分の意見を押し通す事ができませんでした。今、天使大学への道を進めてくれた両親には心から感謝しています。しかし卒業にあたり、初めてと言ってよいくらい、自分の進みたい道を両親に伝え、意志を貫いた自分に気付きました。天使の学び舎は、看護者としての愛を育み、そして私自身の生を見つめ直すことをさせてくれました。卒業を控えた今、皆が声をそろえて言っていることがあります。「本当に天使で良かった」。この言葉には、一人ひとりがこの天使大学での出会いを通して、様々なことを育んだ末にある個々の思いが込められた言葉だと思います。そして私も心からそう思います。これからも、天使大学の卒業生としての愛を持ち続け、これから進む道を自分の足で歩んでいこうと思います。



卒業にあたり

看護学科4年 藤井裕子

2年前の冬、合格発表を見に行った時には、今の自分たちの姿や、どのような学生生活を過ごすことになるのか全く想像することができませんでした。そして、2002年4月の入学式、新入生ではなく新入生の父兄に間違われたところから、編入生2人の大学生活はスタートしました。病院で動きまわっていた日々から一転、一日中座り授業を受ける生活は、夜勤から解放されたにもかかわらず、ちょっとつらかったことを思い出します。

2年間で単位を習得するため、私たち2人は他学科、他学年のクラスに入り、多くの人たちと知り合う機会を得ることができました。見栄を張って体育祭に参加し、体がバラバラになりそうになったり、修養会で夜中話し込み、翌朝ボロボロになったり、3・4年生のパワーに負けそうなることもありました。しかし、これから看護の道を目指す学生とグループワークや実習を一緒にすることは、忘れていた気持ちを思い出すことになり、同時に経験を伝えることは、今までの体験の意味づけの場であったと思います。そして、看護の対象である人間を理解するための様々な理論や、研究的に考えるということの基礎を学び、臨床経験を振り返ることは看護観を見つめ直す機会となりました。今は専門職の責任の重みと、おもしろさをあらためて感じています。

臨床では、日々振り返る時間を持つことの必要性を痛感しながらも、実際にはなかなか困難という現実がありました。しかし、いざ授業の中で振り返ってみると、患者さんとの関わりが不足だった、もっと違う視点で考えたほうが良かったという思いばかりが湧いてきて、逃げ出したくなったこともありました。また、自らの考えを文章に著すことや、研究的に考えるということにおいては、「できない自分」と向かい合わねばならず、ネガティブな気分にとどまりつづける時期もありましたが、多くの先生方、友人に助けられながら2年間を過ごすことができ、とても貴重な時間であったと感謝しています。

「愛をとおして真理へ」という建学の精神のもとでの学びは、人間を理解する視野を以前よりも広げ、心を豊かにするものであったと感じています。この学びが目に見える変化として表れるには、まだ時間がかかるかもしれません。しかし、臨床を離れていた不安よりも、学んだことを生かしていけるのではないかと期待の方が大きいというのが今の気持ちです。



4年間で振り返って

栄養学科4年 久保志織

私の母は天使女子短期大学の卒業生です。母校が大学になる事を知った母が受験を勧めてくれたこともあり、4年前の春に天使大学1年生として入学しました。私はそれまで富山県に住んでいて他の地域で生活をしたことがなかったため、北海道に進学し一人暮らしを始めることに対してたくさんの不安がありました。あれから4年が経ち、一人暮らしや北海道の雪と寒さにも慣れ、大学の授業や行事を通してたくさんの友人ができました。

栄養学科では4年生になると、3週間の臨床栄養実習が卒業研究かのどちらかを、多くの学生が選択します。私は臨床栄養のなかでも特に脳血管障害患者の栄養管理について興味があり、時間をかけて深く学びたいと思ったので卒業研究を選択しました。この研究では脳血管障害を専門としている病院に協力していただき、実際に血液検査などのデータをいただくことができました。なかなか思うように研究を進められず何度も投げ出したくなる時がありましたが、そんな時は、担当の先生や同じ研究室の仲間と励まし合いながらがんばってきました。決して楽しいことばかりではなかったけれど、とても良い経験ができたと思います。私にとって卒業研究をしていたこの1年間は大学4年間で最もつらい時期であった反面、学ぶことが多く、充実した年となりました。

大学は自ら学びたいという意欲を持たなければ多くのことを吸収することは難しいということ、大学での授業や実習・卒業研究などを通して感じました。これから卒業研究や学外実習をする皆さんも、与えられた課題だけに取り組むのではなく、自分の中で問題意識を持つことによって、より良いものが作り上げられるのではないかと思います。

私たちは大学になって初めての卒業生として多くの期待を受けて卒業することになりますが、1年生であるということに対してあまり負いすぎずに天使大学で学んだことを多くの人に伝えていきたいと思っています。



天使大学 第1回卒業生として

栄養学科4年 二木元子

天使大学第1回生として多くの仲間と過ごしてきた4年間で、もうすぐ終わろうとしています。

私が栄養士という職に就きたいと思い始めたのは、中学に入ってから間もなくのことでした。その当時から栄養学科のある大学を探したり、資料を集めたりしていましたが、その頃天使大学はまだ天使女子短期大学で学生募集しており、4年制に行きかかった私は天使大学についてよく知りませんでした。しかし、高校3年の時、天使短大が4年制になり、私たちが記念すべき第1回生になると聞き、真っ先に「ここの」と感じ受験しました。

あの日から4年経ち、私は天使大学に入学し様々な講義や実験、実習を通し数々の知識と経験を積み、教養を身につけることができました。これは単に自分自身の力だけではなく、どんな時にも親身に接してくださった諸先生方の的確な助言のおかげです。しかし、私たちは1回生で先輩がおらず、前例のないことばかりで不安に思い、どうしたらよいか分からない場面に遭遇した時も多々ありましたが、学校側にとっても同様のことが言えるはずなのに、関わらず、私たち諸先生方は、私たちと正面から向きあってくださり、話し合い、不安や難点を回避する術を最後まで温かくご指導してくださいました。

私は1回生として天使でのキャンパスライフを誇りに思い、これから先輩たちや受験生に私たち1回生の天使大学に残した歴史を参考にされるような、悩みごとなどを相談された時、以前先生方から言われた事や自分の経験を話してあげられる先輩になれるよう日々努力してきました。そして、その最後の締めとして天使大学1回生の就職率・管理栄養士合格率を確かな結果として残すことを目標とし卒業して、天使大学第1回生の名に恥じぬよう自覚を持ち続け、これからの人生を歩んで行きたいです。

実習を終えて



生命の誕生の素晴らしさと向き合って

看護学科4年 金子磨名実

4年次の実習において、特に印象に残っているのは母性看護学の実習です。初めの1週は新生児を対象に、そして2週目は主に褥婦さんを対象に学んでいきました。2週目は、10年ぶりに出産された褥婦さんが、久しぶりの育児に少し不安があるとのことで、実習生の私が受け持つことを承諾してくれました。すでに10歳の男の子がおり、今回産まれた児も男の子です。褥婦さんは、「この子が絶対マザコンにするんだ」と張り切って、授乳をしていました。私は、褥婦さんがとても優しいまなざしで、「えらいね、上手だね」と児に声をかけながら授乳をしている時、カーテンで仕切られている空間に“親子”の空気が流れていることを感じました。受け持たせていただいた1週間、実際の援助を学ぶだけでなく、母親そして家族が、新生児を迎え入れて大切に育てていこうとする思いを感じることができました。

そして、2週目の実習最終日、今回は機会がないだろうと思っていた分娩の援助に入らせてもらうことができました。分娩室に入り、私は産婦さんの右手を、左手はもう一人の学生が握りました。陣痛間欠時には、「リラックスしてね。ゆっくり深呼吸しよう」と一緒に呼吸をしたり、腕をさすったり、常に冷たいアイスノンで額や首を冷やせるように、もう一人の学生と交代で冷蔵庫に走っていました。「はい頑張ってください！」いきみと同時に、握っている私の手に産婦さんの力いっぱい強さが伝わってきます。スタッフと学生の声飛び交う中、元気な男の子が生まれ、わが子を見た瞬間、産婦さんは「可愛い」と言って泣き出しました。一つの命の誕生に向けて、母親が全身の力をこめ、そしてスタッフが丸となりその瞬間を迎える。一人の人間が誕生する瞬間に立ち会えたことは、本当に貴重な体験だったと思います。

あれから8ヶ月が経ったある日、学校に行くと、私あてに郵便物が届いていました。封筒の裏には見覚えのある差出人の名前が……。なんと、それは母性看護学の実習で2週目に受け持ったお母さんから送られてきたものでした。封筒の中から出てきた写真には、生後8ヶ月になり、元気に笑っている赤ちゃんの姿が……。思わず胸が熱くなりました。

実習では患者さんと家族に出会い、その方の人生から様々なことを学ばせていただきました。どの実習をとっても、その一つひとつが非常に貴重な出会いだったと思います。送っていただいた写真は、現在、宝物として大切に飾っています。



公衆栄養学実習を終えて

栄養学科4年 掛水紀子

最後の実習を終え振り返ってみると、その一つひとつは私にとってとても価値のある貴重な体験でした。

これまで保健所と保健センターの事業内容を勉強してきましたが、ほんやりとしたイメージでしかありませんでした。保健所で1日、保健センターで4日間の実習を通し、自分の経験として保健所と保健センターの事業内容を捉えることができ、以前よりも理解が深まりました。

保健所の実習では、札幌市の地域保健行政や保健所の業務、保健所における栄養改善業務についての講義を受けました。保健センターの実習では、母子保健事業の乳幼児健診を中心に見学しました。その他に行われている事業や栄養改善業務については講義をして詳しく説明していただきました。保健所は対物サービス、保健センターは対人サービスとしていろいろな事業が展開されていることがよく解り、それぞれの事業内容への理解・関心が一層深まりました。

実習を通して、職員の方々の地域をよく理解した上での上手な対応に何度も驚かされました。ちょっとしたことで気軽に相談できる雰囲気、さらに何度でも相談に来ることができる環境ができていたと思いました。また、相談者に対して、悩みが解決するまで責任を持って取り組んでいることがよく解りました。

健診の際に見学させていただいた先生方の対応は、学ぶところが多く貴重な体験でした。地域に根ざした事業を行うには地域の人々と信頼関係を築き、地域の特性を把握した上で事業を進めていくことがとても重要であると実感しました。

あつという間の1週間でしたが、利用者の方々、職員の方々から学んだことが本当にたくさんあり、毎日がとても充実した実習となりました。お世話になった皆様に感謝し、体験を通して学び得たことを大切に、今後に十分活かしていきたいと思っています。



患者さんの思いに寄り添うこと

看護学科4年 黒田 瞳

私は患者さんの思いに寄り添って看護をしていくことが大切だと思います。4年次の実習ではそれを実感することができる出来事がありました。それは、母性看護学実習での褥婦さんとの関わりからでした。私が受け持たせていただいたAさんは初産婦さんで、実習初日に「今一番不安なことや困っていることは何ですか?」と私が尋ねると、「初めてのことから、何がわからないのかもわからない状態です」とおっしゃっていました。私は、先生のアドバイスも受け、1つひとつできているところ、できていないところを確認しながら、できている部分は支持していくように関わっていかうと思いました。そして、Aさんの疑問に答えたり、Aさんに合った授乳の方法を一緒に考えていきました。また、ベッドサイドに足を運びAさんと話をする中で、分娩によって全身が筋肉痛になっていることがわかったため、背部のマッサージや足浴を行いました。次の日には「とてもリラックスできた」という言葉をかけてもらい、分娩の疲労や育児で大変な褥婦さんにとって少しでもリラックスできる時間を持つことは大切なのだと感じました。褥婦実習は5日間という短い期間ではありましたが、Aさんの気持ちを知られたと思って関わったことが、思いをくみ取っていくことにつながったのではないかと思います。実習後、Aさんから届いた手紙に「初めてのことに戸惑っていたところを手助けしてもらい、心強く楽しい入院生活を送ることができたのは黒田さんのおかげでした」と書かれていたことでそのことを実感することができました。私は、この言葉がとてもうれしく、その後の実習に向けての自信にもつながっていきました。

他の領域の実習でも多くの友人や先生方に助けられ、学びのある実習をすることができました。患者さんの思いを大切にしていきたいという気持ちを忘れず、これからは、今まで学んだことを臨床で生かしていきたいと思っています。



病院実習を終えて

栄養学科4年 福山かおり

今までの4年間で私は、様々な実習を体験してきました。ここでは、5週間と長かった病院での実習についてお話したいと思います。

臨床栄養学実習での2週間は給食管理が中心で、臨床栄養指導論実習3週間は病棟での実習でした。実習では、一般常食を食べている患者さんを対象に食事アンケートを行ったり、実際に患者さんの栄養指導（とは言っても単位計算などです）をさせていただいたり今思えば充実した実習期間を過ごしていました。

実習期間中は、自分と周りの友人との実習内容の差に悩んだり、実習先の先生との話し合いがうまくいかなくて辛い思いをしたりと、3週間の実習を選択したことに後悔したこともありました。しかし、そのぶん実習をやり終えたときの達成感のはものすごく大きかったです。もちろん、実習で学んだこともたくさんあります。

実習は、学校では学べない貴重な体験（患者さんとの交流など）ができます。実習で学んだことは、学校での授業と違って自分自身で組み立てていくため、実習が終わった今でも頭に残っています。また、実際の現場を体験することで、自分が将来どういう管理栄養士として働いていきたいのかを考えるきっかけにもなります。

辛かったこともありますが、今では病院での実習を選択してよかったと思っています。これから実習を控えている1、2、3年生の皆さんも病院での実習に限らずさまざまなところでの実習経験を生かし、自分の進む方向を見つけていけるように頑張ってください。

就職活動

看護師になる初めの一步

看護学科4年 菊池礼香



「人生の一大イベント」であると思われた就職活動は、私にとって「看護師になる初めの一步」となったわけである。この微妙な気持ちの変化をどう表現したらよいかわからないが、目先の就職ばかりを考えて「いったい、どの病院がいいのか」と思い悩む自分から、「どの病院に就職しても、どのくらい成長していけるかは自分次第。それに、また新しいことを勉強したくなっ

たら、その希望に合った場所を見つけたらいい」と考える自分に変化していったと思う。

そこで私が大事にしたのは、希望とフィーリングである。私の場合、希望が漠然としすぎていたので、自分の感覚を大事にするということは大いに役立った。希望は、札幌の病院で、教育がしっかりしているところ。本当に漠然であった。就職説明会には3病院、実際に就職試験を受けたのは3病院。説明会にも行き、試験も受けたのは1病院である。実際に説明を聞いた、病院の雰囲気を感じたり、そして就職試験を受けることによって、その場が自分に合っているか、いないか、好きか、嫌い、か、そういう感覚が生まれてくる。私が最終的に一つの病院に決めたきっかけは、就職試験の場の雰囲気であった。すんなり「いいな、この雰囲気。働いてみたい」と感じた。そしてその気持ちを大事にした。気になる就職口があるなら積極的に挑戦すべきだと思った。

自己分析で チャンスをつかむ

栄養学科4年 川上ひとみ



大学入学当初、病院栄養士を目指していた私ですが、ひょんなきっかけからフードサービスに興味を持ち、食品メーカーへの就職を希望するようになりました。ところが短期大学時代の先輩のほとんどは、栄養士として病院や施設などに就職されており、民間企業へ就職された先輩はごくわずかであったために、情報が少なく、どのように道を開けばいいのか戸惑いました。手探りの中、先生方の助言やインターネットの就職斡旋サイトなどを頼りに、私の就職活動はスタートしたのです。

まずはあらゆる企業説明会に積極的に参加し、情報収集に専念しました。始めは全く先の見えない活動で、落ち込むことも多くありました。私の場合、活動当初は「栄養士のスキルを生かせる仕事」を意識しすぎるあまり、自ら視野を狭めていたの

す。そう気付いた時点から、自分を知るための自己分析を何度も繰り返し、可能性をできるだけ広げる努力をしました。結果、1社の食品メーカーから内定をいただくことができました。

栄養士業務のひとつに、食材・食品の選択がありますが、私の仕事はその食品を供給することです。そう考えると立場は違いますが、「食」というレールの上で、全てはつながっているように思います。最近では食に対するさまざまな問題が飛び交っていますが、それは時代にともない刻々と変化するものです。現代人の食に関するニーズを探りながら、大学で学んだ食べることの意義と重要性を、なんらかの形で社会に発信していきたいと思っています。

今や日本にいながら世界の味が手軽に食せるようになりました。私の就職する企業でも世界の食材や調味料を扱っています。職務内容の中には、商品を使った料理研究がありますが、できるだけ身近な食材を使った、手軽にできる料理を開発したいと考えています。新しい味や料理法が、少しでも現代人の心に響き、食の大切さや素晴らしさを一人でも多くの人に伝えられるよう、努力していきたいです。

学生課近況

学生課長 内山昌子

天使大学の未来を信じて

本誌の第1号から、続けて誌面を提供していただきましたことに感謝。思いつくまま体裁など考慮せずには書きましたが、原稿をお渡す度クスッと笑っていただくと責任を果たしたような気になりました。今回はそんな期待に背く内容になり(その点本学にはチャペルがあり、ごめんなさいと謝る場所が用意されているのは便利)、広報活動の一環である本誌の内容にはふさしくないでしょうが、退職者への寛大な慈悲をもってお許しください。

学生と教職員の数が増えるに従い、ソフト面での「良さ」が薄れてきたと感じます。短大時代からキリスト教精神に基づく教育をしているはずの本学の「良さ」が、学生はもとより他大学から来られた教職員に伝わっているのでしょうか。大学として確固たる姿勢で、機会あるごとに、機会をつくつ

ても、建学の精神を伝える努力を度重ねるの必要を感じます。私が勤務を始めて間もなく、「キリスト教にはイースターが大切なのに、行事にそれが無いのはおかしい」とSr高木節子学生部長に投げかけると、信者で無い者からの疑問にすぐ回答がでました。現在の組織的手続きを踏む方法で、果たして実現できたかと最近の様子から考えさせられます。

学長と話たび、最後は教育理念をいかに伝えていくかになりました。一人で聞くにはもったいないと思い、「どうか、まずは教職員へこのようなことを数多くお話ください」と超多忙を承知の上でお願いいたしました。学長は学生時代にSrセルビリアナ中村タキ先生直々にいわゆる「天使の精神」を伝授されていますので、危機感を一番お持ちと存じます。ライセンスを取得するだけなら天使大学でなくてもいいはず。大枚の授業料を払って、本学に入学した学生の期待に応える大学として、社会から評価される天使大学であってほしいと切望いたします。

最後に、就任して1年にならない事務局長の言葉です。「学生を信じましょう。うちの学生なら大丈夫。できます」。跳び上がるほどうれしかったことをお伝えいたします。

松宮英視理事長が叙勲受賞

事務局長 大津忠行



松宮英視理事長

昨年秋の叙勲で本学園理事長・大学教授の松宮英視先生が長年に亘る研究・教育活動と大学運営に対するご功績が認められて「瑞宝中綬章」を受賞されました。そのことをお祝い申し上げ、紙面をお借りして先生のご略歴とご功績などを簡単にご紹介いたします。

先生は1948(昭和23)年に北海道大学医学部をご卒業後、1953年に医学博士の学位を取得し、米国州立大学への留学などを経て1972年に附属病院教授、1985年に医学部教授になられ、この間、附属病院の検査部長・材料部長・検査技師学校長・病院長および大学評議員など役職を併任されると同時に専門領域の各種学会の幹事・評議員・支部長、医師会理事、財団等の協議会委員長等々数多くの職務に携わって来られました。

1989(平成元)年に停年退職して北海道大学名誉教授となり、同時に天使女子短期大学の教授として着任されて1997年度1年間は学長(事務取扱)の職務を担われ、同年度以降は天使学園の評議員・理事長になられ、2000年の四大への改組後は大学教授として今日に至っておられます。

先生が専門とする研究分野は、細菌学、ウイルス学の基礎的ならびに臨床的分野の研究、免疫血清学など多岐に亘っていますが、特に「急性出血性結膜炎」と命名された新型結膜炎の原因ウイルスを世界で初めて報告され、これらの業績により1982年には北海道医師会賞等を受賞されています。

また、教育の分野では、北海道大学時代にあっては、細菌学講座、臨床検査医学講座を中心として医学進学課程・医学部・大学院医学研究科のみならず、附属学校を医療技術短期大学部

として改組し、臨床検査技師・看護師・助産師の育成にも幅広く貢献されて来られました。天使大学においても病態・治療学、医療と倫理などの科目を担当して、看護師・保健師、管理栄養士の養成に貢献されています。

昨年11月末に約140人の関係者が集い、先生ご夫妻を囲んで受賞をお祝いする会が催されました折に先生はご挨拶の中で、「足を怪我した時には、……シスターや教職員の熱い祈りに支えられて復帰することができました……。」と仰られました。日頃、信頼して止まない先生のこのお話に、「キリスト・イエスに結ばれていれば、割礼の有無は問題ではなく、愛の実践を伴う信仰こそ大切です。」(ガラ5:6)との聖書の御言葉を思い出しました。今後ともご健勝で天使学園をさらなる充実・発展へと導いてくださることを心から願っています。



日本初の助産研究科 —専門職大学院を設置—

総務課長 久保則雄

天使大学は、1947年に本学の母体である札幌天使女子厚生専門学校を開校して以来、現行の保助看法施行後、全国に先駆けて、1952年に天使助産婦学校を設立し、その後、1964年まで助産婦教育を実施してきました。1965年にこれを短期大学専攻科に改組し、2003年に専攻科学生募集を停止するまで、助産婦学校からの卒業生135人、専攻科卒業生857人を世に送り出してきました。その活躍は、道内、国内はもとより、東南アジア、アフリカ、中近東などでの国際活動にも現れています。2000年に、女子短期大学から4年制大学に改組転換した時には、助産師の国際的な職業水準にかんがみ、また、組織だった看護基礎教育を円滑に実施するために、学士課程に助産学専攻を開設せず、より国際的な水準に合った助産教育の展開を意図して、大学院に助産教育を開校することを目指してきました。看護基礎教育の大学化の進行に伴い、助産師教育を高度専門家の育成にふさわしい大学院に位置づけることは、国際的にも重要な課題です。2004年3月、4年制大学への改組転換の完成年次を迎えるにあたり、専門職大学院において、高度専門職業人としての助産実

践家の養成を始めることにし、次のような教育目標(目指す助産師像)を掲げ、2004年4月に開設することになりました。

——教育目標〈目指す助産師像〉——

- 自立して医療機関や地域で女性に優しい自然出産を支援するため、正常な過程にある対象の診断・ケアができる能力の育成。さらに異常のアセスメント・ケアができる能力の育成。
- 助産管理、助産師教育におけるリーダーシップ、助産チームおよび他職種との連携・調整能力の育成。
- 次世代育成の援助として子育て支援のためのアセスメントと支援を地域や他職種との連携・調整のうえ推進する能力の育成。
- 性と生殖に関する倫理問題のアセスメント・性教育プログラムの開発、各ライフステージに応じた健康教育や相談に応じられる能力の育成。
- ライフサイクルに対応して女性のリプロダクティブ・ヘルスの増進を図るため、対象の権利と意思決定を尊重しながら相談に応じたり、教育、援助活動ができる能力の育成。
- 国際助産活動について理解を深め、実状に即した実践によって発展途上国に貢献できる能力の育成。
- 安心して子どもを生み育てるために地域母子保健活動を他職種と連携・協働しながら主体的に実践できる能力ならびに政策化できる能力の育成。
- 実践を科学し、研究成果を実践に役立てることができる基礎的能力の育成。

(2003年12月5日 北海道新聞、学長インタビューより抜粋)

2004年度の入試状況

入試委員長 荒川義人

2004年度天使大学の入学試験がすべて終了しましたので、ここに報告します。(2月末日現在)

●志願者数・受験者数・合格者数等

◆看護学科

試験種別	定員 (名)	志願者数	受験者数	合格者数	倍率 (受/合)
推薦	40	95 (8)	95 (8)	41 (2)	2.3
社会人	30	10 (2)	10 (2)	3 (0)	5.3
一般		327 (16)	314 (14)	58 (2)	
センター利用	10	154 (7)	154 (7)	24 (0)	6.4
総計	80	586 (33)	573 (31)	126 (4)	4.5

*()は、男子の内数

◆栄養学科

試験種別	定員 (名)	志願者数	受験者数	合格者数	倍率 (受/合)
推薦	45	58 (1)	58 (1)	45 (1)	1.3
社会人	30	2 (1)	2 (1)	1 (0)	2.9
一般		145 (4)	144 (4)	50 (1)	
センター利用	10	102 (3)	102 (3)	21 (0)	4.9
総計	85	307 (9)	306 (9)	117 (2)	2.6

*()は、男子の内数

2003年度 学事暦 (後期)

9月8日 後期授業開始
 10月18日 編入学試験(看護Ⅰ期一般、社会人)
 11月7日 体育祭
 15日 推薦入学試験、社会人入学試験
 28日 戴帽式
 29日 編入学試験(栄養)
 12月8日 創立記念日
 18日 クリスマスの集い、学生総会

12月22日～ 冬期休暇
 1月17・18日 大学入試センター試験
 24日 編入学試験(看護Ⅱ期)
 27日～ 後期定期試験
 2月6・7・13日 一般入学試験
 17日 センター利用入学試験(面接)
 3月12日 感謝のミサ
 15日 卒業証書授与式

就職相談室ニュース発行しました

就職委員長 黒川正博

就職委員会では、「就職相談室ニュース」を毎月1回のペースを目標に発行しています。第1号は2001年7月の発行から、最新号である2004年2月の発行で第15号を数えます。

ニュースの内容は、その時々就職委員会で企画・立案・実施した就職活動をサポートするガイダンスなどのお知らせや、就職に関連するさまざまなデータ・資料などから構成されています。

ニュースの記事は、就職委員会の委員会メンバーが分担し、作成・編集を行っています。

就職委員会では、就職活動に役立ち指針となるようなニュースを、パワーアップと充実を図りながら掲載していく予定です。



2003年度在籍者数 (2004年3月1日現在)

学 科	人 数
看護学科	1年 88 2年 89 3年 90 4年 88
栄養学科	1年 93 2年 104 3年 97 4年 92

編集後記

天使女子短期大学が天使大学に生まれ変わって4年が経とうとしています。4年生生までがそろい大学の初めての卒業生が社会に出て、卒業生一人ひとりがまた新たな一歩をふみだしてゆく姿をみながら、大学もまた新たな一歩をふみだし、さらなる歩みをすすめてゆくときなのだと思います。大学の歩みと共に発行を重ねた天使大学報も本号で第7号となりました。第6号から学報に掲載されているカットは、本学教授片桐千明先生の作品によるものです。あたたかな温もりと精密で繊細な雰囲気いっぱいのカットが誌面を一層もりあげています。大学の歩みを生き生きと伝える学報づくりを目指していきたいと思っています。読者の皆さまからの学報へのご意見などをお待ちしております。

(広報委員会 小川・青木)